

時を紡ぐ水彩

義父の描いた風景

画 金子史朗



1 「はじめに」

本書の水彩画を描いた金子史朗は、筆者の義父です。父は東京の立川市に在住し、半世紀以上も身近な自然を描き続けてきました。

数々の生き生きと描かれた自然は、義理の娘である私を魅了し、父の記憶へと誘うのです。

本編は5章構成で、春夏秋冬の風景とともに父の過ごしてきた時間を綴ったものです。日本的な趣を見事に表現した作品の数々を心ゆくまでご堪能ください。





父の絵と記憶の旅へ

結婚して10年経った今も、初めて夫の実家に行った日のことをはつきりと覚えて
います。

義父は緊張している私を気遣い自分の部屋
に呼んでくれました。そして、夫の小さい時
の写真を見ながら色々な話をしました。

父の優しい人柄にふれ、すっかり緊張が解
けた私は、ふと部屋の中に絵が溢れている
ことに気が付きました。

「お父さん、絵が好きなんですね。」とつ
ぶやくと、照れくさそうに頷き、「あまり
人に見せるようなものじゃないだけ
ど・・・」と言いながら、タンスの中に雑
然と束ねてある画用紙を引っ張り出して机
の上に広げてくれました。

何枚も何枚も丁寧に描かれた自然・・・

最初、父が描いたものだとピンときません
でした。絵を描くのが趣味だとは聞いてい

ましたが、本格的に描いているとは思って
いなかったのです。

驚きと感動をもって観る私。それを照れ臭
そうに見る父。

それから、私は実家に帰省する度に、父が
描いた絵を見せてもらうようになりまし
た。

絵を通して、父と色々な話しをするのはと
ても大切な時間になり、いつの間にか父の



絵は私にとって大切なものになっていました。

絵を見ながら色々な話をしました。戦争のこと、祖父や祖母のこと、失われてしまった自然のこと・・・半世紀近い時間をかけて何百枚も描いてきた作品には、その時々父の想いが詰まっています。

でも、父はこれまで絵を他人に見せたことはありませんでした。

他人に向けて表現してきた訳ではないと語り、ただ毎日毎日絵を描いてはタンスの引き出しに束ねてきました。

このままでは、誰の目に触れることもなく、いつの日か朽ちて失われてしまいます。実際、多くの作品がすでに傷んでしまっているのです。

父が人生の多くの時間を費やして打ち込んできた作品たちがひっそりと、やがて失われてしまうと思うと、私は胸が張り裂けそうなくらい悲しい気持ちになりました。

そんな想いを父の描いた絵にさせたくない・・・

私もしたくない・・・

そして・・・

本書は、義父の風景画をまとめたものです。30代の私と80代の父が絵を通して語り合った記録となるものです。

絵には不思議なチカラがあります。

父の描いた優しい色彩の絵は、父の言葉とともに私の想いを戦時中や大自然へと導いてくれました。

最初は絵をまとめるだけのつもりでいましたが、父と話を重ねるうちに戦争という時代を生きてきた人物が何故絵を描くことに惹かれたのか残しておきたいと思うようになり、拙い文章ではありますが、絵に私の文章を加えさせていただきました。

もちろん、絵の良さというものは作者の人生とは関係なく、見る人の心に直接響くものだと思っています。ですが、父の心温まる風景画とともに、戦争という時代から、豊かではあるけれど虚しさが漂う現代を生きてきた一人の人物の、その生涯に少しでも触れていただけたら幸いです。



